所報
くしろ
No.303　釧路教育研究所　令和３年３月

釧研リニューアル元年

釧路教育研究所長　福原　克洋

例年より雪が多かった今年も雪解けが進み、春の訪れを感じさせる季節となりました。さて、令和２年度、釧路教育研究所は組織及び活動内容の見直しをかけ、リニューアルしての初年度となる年でしたが、７月までは所員の学校でのコロナに対応した教育活動を優先させるため、広報活動を除いて、活動を一時休止しました。今年度、所員が初めて顔を合わせたのが８月２５日でした。その後、８回の所員研修を行いました。授業研究部においては、本号でも紹介していますが、新たな研究に着手しています。また、調査研究部においては、各校の研究内容や公開研究会、ICT活用等の新しい内容を盛り込んだ所報を発行しました。また、各町村におけるICT機器の活用状況や授業研究部に関わる各町村での状況の交流も行いました。２つの部が釧研の研究内容を共有し、連携しながら研究を推進する体制が整いつつあります。今年度の活動を通して感じたことは、所員が現場の先生方の声を聞きながら、困り感や必要感を感じた中で、研究を推進していたことです。次年度は、今年度の活動を土台として、実践を積み重ね、研究紀要の発行も含め、発信していきます。

また、各町村教育研究所の所長の皆様と、今後の釧路管内学校教育研究大会のあり方についても検討しました。教職員数の減少に伴って、各町村教育研究所においても、教科部会の編成が難しくなっており、組織の改編が進んでいます。釧路管内学校教育研究大会につきましては、今年度の活動が進んでいない町村が多かったことから、令和４年度開催に向けて準備を進める予定です。いずれにしても、釧路管内の教職員の資質・能力の向上を目指した研修となるよう知恵を絞ってまいります。

所報でも紹介させてもらいましたが、コロナ禍においても、感染対策を実施した上で、公開研究会を開催した学校もありました。また、一斉の臨時休業となる中、双方向のオンライン授業を試行した学校、また、ギガスクール構想の実現により、一人一台のタブレットが配付され、早速、活用を始めている学校もあります。これらの実践を釧路管内の財産として共有することもセンター機能としての釧研の役割と考えています。

大変とは「大きく変わること」という言葉を、今年はよく耳にしました。コロナウイルス感染症により、大変だった期間を後から振り返り、いい意味で「大きく変わった」節目の時だったと言えるよう、そして、釧研も釧路管内教育の発展に寄与できるよう活動を推進してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

終わりになりますが、釧路教育研究所の事務員、長谷川保子さんが３月３１日をもって定年退職となります。事務員として、長きにわたり釧路教育研究所を支えていただきました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

釧路管内各町村の公開研究会の紹介②

前号に引き続き、３密対応等を図りながら、釧路管内各町村で行われた公開研究会の取組や様子等について掲載します。

○浜中町立茶内中学校（令和２年１１月２７日公開）

研究主題：思考力・判断力・表現力を高める授業づくり
（１年次）～アクティブ・ラーニングに視点を意識した授業改善～
（２年次）～カリキュラム・マネジメントの視点を意識した指導計画を基盤として～

今回の公開研究会では、理科と保健体育科でアクティブ・ラーニングの視点を意識し、また各教科・各学年等の連携を図った学習指導を展開しました。

【導入】「前時の振り返りと学習課題の明確化」

・必要感のある課題を提示し、生徒の興味関心を引き出した。
・TVの星占いなど日常の題材から授業内容へと結びつけた。
・ノートや教科書で前時の確認を行い、定着度をそろえた。
・生徒の安全確保と体力向上のために準備体操と補強運動を行った。
・黒板に課題を明示し、1時間での見通しを持たせた。

【展開】「グループ学習やチーム戦を通して、問題解決に向かう学習の場の設定」

・実験を通して、既習事項を生かしながら問題解決をしようとしていた。
・ワークシートを活用して、解答を導きだそうと努力していた。
・工夫したルールにより、試行錯誤して課題解決に向かっていた。
・仲間の声掛けや助け合いが随所に見られた。
・思考ツールとしてホワイトボードを使い、生徒同士の考え方や意見を交流していた。
・悩んでいた生徒がいた場合は、アドバイスを与えるなどの姿が見られた。

【終末】「課題に正対し、次時へつなげるまとめ」

・モデルを使った視覚に訴えるまとめがあった。
・思考を言語化するために、グループ代表の発表する場面があった。
・時間を図ったり、得点を計算し、向上的な変容があったことを体感させ、生徒の自己肯定感を高めるまとめを意識していた。

授業後の研究協議は、授業改善に向けての課題と改善方策が明確になるよう工夫され、以下のような流れで進められていました。

①グループ協議で授業の良い点と課題点を出す。
②全体で良さと課題の共通理解をする。その中から課題を数点に絞る。
③再度グループ協議を行い、絞り込んだ課題の改善方策を協議する。
④グループ代表者が、それぞれの改善方策を共有し、今後の授業改善に向けての学校としての共通方策を確認する。

以上の研究協議により、授業の課題や授業改善に向けての留意点が一般化され、どの教科でも取り組んでいくことができるものとなっていました。

○厚岸町立厚岸中学校（令和２年１１月２７日公開）

研究主題：自ら「学び続ける」生徒の育成
～資質・能力を明確にした学習過程の工夫を通して（１年計画）～

「毎時間の授業において、教師が事前に生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、学習過程＜目標（ねらい）、課題、まとめ、振り返りなど＞を工夫すれば、自ら『学び続ける』生徒を育成することができるだろう。」という仮説のもと、第１学年国語科、第２学年保健体育科、第３学年社会科の公開と事後研究を行いました。

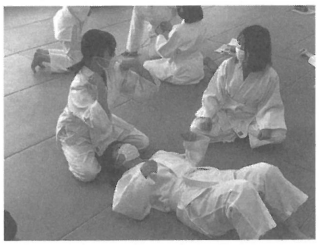
【導入】「目標の達成につながる『問い』の内容や把握する工夫」

国語　マンガを活用し、「ドキドキ」の描写から考えられる状況や心情の違いを体感させた。
⇒描写への着目の仕方を変えると、心情の読み取りも変化することを理解することが目標

保体　横四方固めの復習と上四方固めの示範により、既習を生かすことができると実感させた。
⇒アドバイスをしあうことで、より効果的に上四方固めの「受」を押さえることが目標

社会　高校生の起業例を取り上げ、アイディア次第で会社として成功できることを挙げた。
⇒株式会社経営者体験によってさまざまな視点から経済を読み解くことが目標

【展開】「目的意識を持って取り組める問題場面と課題の設定」



国語　「感情の輪」の語句を使い、物語に根拠を求めながら、人物の感情は絶えず変化していることに気づきながら読むことができた。

保体　仲間がおこなっている技の課題を発見し、改善方法をアドバイスが適切かどうかをワークシートで確認することができた。

社会　既習の市場経済における経済活動の在り方を踏まえながら、会社を経営するうえで必要な条件を考えることができた。

【終末】「何を学び取ったのかを記録させる「振り返り」の工夫」

国語　前後の文脈や感情の動き、他の要因によって、外面と内面で異なる感情が表されることもあることをわかりながら読むことができた。

保体　グループで上四方固めのポイントを確かめながら10秒の抑え込みを体験することで、技の定着には仲間同士の助言が必要であることを体感することができた。

社会　労働者側の視点で、「利潤」「労働環境」「CSR」などをキーワードにし、他者の考えも参考にしながら、会社経営の工夫点について振り返った。

事後研究から・・・

国語　大切なのは、話すことであり、さらに大切なのは、聞くこと。
聞き方にもフォーカスをあてて、対話的学習や対話の仕方について深めたい。

保体　新学習指導要領では、「主体的に学ぶ態度」を自分の学びの「ねばりづよさ」や「調整力」であるとしているので、単元の中盤から後半に位置づけられるもので、そこで評価していきたい。

社会　１時間目に同じ内容でやってみても面白い。
※小学校でもゴミの分別の授業で行うなどの例もある。
学習する中で新たな知識が入り、そのことから新たな問いが生まれていく。

釧路教育研究所研究概要の紹介

釧路教育研究所では、次年度からの本格的な授業実践に向けて、研究理論の構築に努めてきました。ここでは、本研究所の研究理論の概要について紹介します。

研究主題：【問い直す】学び（０／２）
研究副題：自己調整学習の視点に立った授業改善

目指す子ども像
- ○　学びの道筋を見通す子ども
- ○　自分の力に合わせて学び方を問い直す子ども
- ○　自己を振り返り、次の学びにつなげる子ども

【研究仮説】
単元や一単位時間において、見通しをもち、学習方略の選択やその振り返りを行うことによって、子どもは主体的に学習に取り組む態度を高めることができるだろう。

【研究内容(1)】「単元計画、一単位時間における振り返りの視点づくり」
- ・単元および1単位時間において児童生徒が効果的な振り返りを行うための視点の設定

【研究内容(2)】「振り返りの視点を効果的に活用した授業づくり」
- ・学びの出発点としての動機づけ、見通しの工夫
- ・振り返りの視点と動機付け、学習方略を関連づけた単元計画、一単位時間の工夫

釧路教育研究所授業研究部では、令和２年度より子ども達の主体的に学習に取り組む態度について研究することとし、研究主題を「問い直す学び」、副主題を「自己調整学習の視点にたった授業改善」と設定した。主題にある「問い直す」とは、①課題に対して始めの問いをもったり、課題解決の方法について選択したりすること②自己の振り返りや他者との交流から自身の学習の進め方や解決の方法について見直し、修正を図ること③単元や一単位時間の学習の過程や結果を振り返り、身に付いた資質・能力について次の学習や生活に生かそうとすることであり、子どもが主体的に学習に取り組む姿を表している。「問い直す学び」を具体化するためには「自己調整学習の視点」を日常の授業に生かすことが重要であると考えている。自己調整学習とは、学習者が学習過程のすべてに能動的に関わり、自己の学びをコントロールしながら学習目標を達成していこうとする学習であり、＜動機付け＞＜学習方略＞＜メタ認知＞の３要素を重視した授業づくりが重要であると言われている。そして、自己調整学習の視点を踏まえた授業を通して私たちが育てたいと考える子どもの姿が「目指す子ども像」である。

私たちは、この子ども像に迫るためには、子どもが学習過程と学習結果を振り返り、身に付けた資質・能力を理解したり、できるようになった理由や次の学習への取り組み方を考えたりするなどのいわゆる「メタ認知」の力を高めることが重要であると考えており、特に授業における「振り返り」を重視している。具体的には、単元や１単位時間を通して、子どもが自己の学びを効果的に振り返ることができるようにするための視点づくりと、振り返りの視点を効果的に活用した授業づくりの２点を研究内容として設定し、研究仮説の検証を進めて参りたいと考えている。

新年度より授業実践を通して研究仮説の検証を行っていくが、管内の多くの先生方にご協力とご指導をいただけると幸いである。

★釧路教育研究所★　所報３０３号
発行日：令和３年３月
発行所：釧路教育研究所
発行者：福　原　克　洋
E-mail　info@senken.net
URL　http://senken.net/